

我 と は 何 か

林 信 弘

第一章 我とは何か？

Que suis je? (我とは何か?) この問いはあらゆる問いの出発点である。なぜならば我の解明なしに探求されるあらゆる問いはどこまで行っても不透明性をめぐり去ることができないから。しかしまたこの問いは環帰点でもある。なぜならばそもそもこの問いは、それがいかなる問いであれ、その問いを問うているところの我、その我とは何か? という問いに外ならないから。それでは、いかにして我々はこの問いに答えうるであろうか?

まず第一に確認されることは、我々が通常この問いを問う時、その問うということそのことにおいて、すでにこの問いを対象的に定立してしまっている、ということである。それゆえ、Que suis je? というこの問いはもはや全体として反省されるのではなく、suis の欠落したただ単なる objet (対象) としての我をのみ問おうとする問いへと下落してしまい、しかもこのことが明晰に自覚されていなければならないだけ、なお一層この下落傾向は強まるのである。そして一旦この問いを対象化し、objet としての我の探求へと向かうや、我々は我を分割しうものとして取り扱い、我を諸現象の連鎖 (la série des phénomènes) へと還元してしまうのである。この方向は明らかに科学的思考 (la pensée scientifique) の方向と一致しており、それゆえ我は科学的思考の多種多様な objet となる。しかしここでは、この科学的思考の内容については問わないことにしよう。なぜならば科学的思考というものは文字通り百科全書的であり、従ってそれによって展開される我の内容を一々説明していたのでは切りがないし、またそれはこの論文にとって大した意味ももたないから。ただひとつここで問題としたいことは、この科学的思考が拠って立つ所の根本原理、つまり我の一連の諸現象への還元ということである。そしてこの根本原理に立ち向かうや、直ちに重大な反省が生ずる。すなわち、我ははたして諸現象の連鎖へと還元しえるのか? と。しかし今仮にそれが可能であるとしてみよう。我を諸現象の連鎖とびたり合致するものとしてみよう。そうするとそれはいかなることを意味するであろうか? 明らかなことは、ここにおいては我を、現象としての moi (我) とそれを超越している moi-même (我そのもの) とに分ける二元論が否定されているということである。従って、我の探求は、我を我たらしめているとこ

ろの超越的な存在の探求ではなくて、一連の諸現象としての我の essence (本質) の探求ということになる。ところで、諸現象の連鎖としての我とは、誕生から出発して次々と自己を現わにして行くところの我の自己展開ということであるから、我とは畢竟、la vie (人生) に外ならないということになる。つまり、Que suis je? という問いは、Qu'est-ce que la vie? (人生とは何か?) という問いと同じだということである。しかしここで問われるところの我は完全に自己展開を停止してしまっているものでなければならぬ。換言すれば、死によって完結させられているものでなければならない。なぜならば、未だ我が十分に自己展開の余地を残しているならば、この問いの解明は不可能であるのだから。それゆえこのことからさらに明らかとなることは、ここにおいてはもはや我は全面的に J'étais (我はあった) の次元に下落してしまっているということである。Je serai (我はあるであろう) を完全に失なって静止した我のみが問われているのである。しかしそれならば、この J'étais としての我の本質の解明は可能であろうか? 次に問題となるのはそれである。しかしよく反省してみると、これは不可能である。なぜならば、我の本質を思考しえるためには、我は死を迎えてしまっているものでなければならないが、しかしそうすると、一体誰が我の本質を解明するのであろうか? 明らかにそれは l'autrui (他者) であると言わざるをえない。なぜならばもはや我が自己自身の力で自己自身の本質を解くことができないのだから。しかしそれでは他者なら我の本質を解きえるであろうか? それもやはり否である。J'étais とは、Je ne suis plus (我はもはやあらぬ) というに外ならず、従って J'étais は必然的に Je suis (我あり) の否定を潜りぬけて来ており、それゆえ J'étais はたえず néant (無) のうちを漂っているのである。ということは、他者によって思考されているところの我が J'étais としての我とびたり一致することは決してなく、それゆえ他者の一連の思考によって現わになるところの我でもって、我の本質を決定したところで、それで真に我の本質を解明したことにはならないのである。このことは、J'étais が不透明 (opacité) であり、他者の観点の相異によって無際限に変化するということの意味している。かくして、他者といえども我の真の本質を解明することはできないのである。しかし、この

ような我の解明の不可能性は我を諸現象の集合体に還元してしまったことから来るのではないのか？ 我の現象性のみ目をうばわれて、我の超越性を排除してしまったことに帰因するのではないのか？ 我々はこの反省に対していかに答えるであろうか？

この反省が時・空間的領域を超えたものへと向かっていることは明白である。なぜならば時・空間内に存在するものは現象でしかないからである。こうしてこの反省から、諸現象の集合体としての我の背後に絶対的な存在としての moi-même を定立することへと導かれて行くのは必然的である。ところが、そこからもう一步を進めて、それではこの moi-même とはそもそも何か？ どうすればそれを考えうるのか？ と問うや、たちまちにして我々は途方に暮れてしまうのである。なぜならば我々が思考しようとするものはあくまで現象だけであるから。それゆえ、たとえこの moi-même がどのようなものとして——例えば、permanent (永遠なるもの) として、humanité (人間性) として、あるいは精神分析学における Es として——思考されようとも、それが思考される限り、すでにそれは単なる現象にしかすぎないものに転化してしまっているのである。我々は、例えば、moi-même としてのかぎりにおける humanité なるものがいかなるものであるのか？ 決して思考することができない。もし何らかの方法で思考しようとするならば、どうしても現象性のレベルにまで復帰せざるをえないのである。しかしそうだとすると、超越的な存在としてのこの moi-même は l'être indéterminé (無規定的な存在) だということになるが、それは結局、この moi-même を néant とみなすことである。言い換えれば、この moi-même は決して存在せず、ただ我々が勝手に l'idée ultime (究極の観念) として定立しているだけのものにしかすぎないということである。かくして、我々は何ら得る所なく再び現象の世界に投げ返されるのである。

しかしそれにしても、何故我々は、Que suis je? というこの問いの解明に行き詰まったのであろうか？ まさにここにおいてこそ、新たな反省の声に耳を傾けなければならない。すなわち、我々はそもそも出発点から誤っていたのではないのか？ 我々の誤りは、対象化された我において、altérité (他者性) としての我において、the man in the street (街路の人) の次元にまで下落した我において、我を解明しようとしたところにあるのではないのか？ 真の我は決してこのような objectivité (対象性) のレベルには存在せず、むしろ全く逆に、sujet (主体) の側にこそ存在するのではないのか？ しかしもしそうだとするならば、この sujet としての我とは何か？ と。かくして、

我々は全く逆の反省の方向へと進んで行くのである。そしてこの方向の必然的な帰結は我を cogito (我思う) とみなすことである。なぜならば、この方向は現象を否定する方向であり、ということはいつさいの état (状態) を否定して行くことであるが、しかしそうなると、Je marche (我は歩く)、Je regarde (我は見る)……等々も状態化された acte (働き) にしかすぎないものとして次々と排除されて行き、こうして最後に cogito の acte に到りつくがゆえに。そしてこの cogito の立場からは、諸現象 (諸状態) は自己の反映 (reflet) ないし投影にしかすぎないものとみなされる。Cogito は、あらゆる時・空間的なものから自由であろうとし、自由な acte であろうとし、それどころか、あらゆる時・空間的なものを自己の反映でしかないと主張するのである。決定論は排斥される。しかし我々は、このような cogito をはたして本当に肯定することができようか？ もちろん、cogito を肯定するところのもの、それもまた cogito である。しかし、今度はこの cogito が cogito そのものとしての自己自身を肯定することは可能であろうか？ 答は明らかに否である。なぜならば、どれほど低い段階であれ、一端 cogito が肯定されるや、たとえそれがいかに自由な、あるいは純粋な acte として肯定されているように見えようとも、あくまでそれは虚像にしかすぎず、実際はすでにそのような cogito は状態性のレベルに、言い換えれば客体化された主体のレベルに転落してしまっており、もはや真の cogito の影にしかすぎないのであるから。肯定しえたと思う瞬間、たちまちにしてその cogito は真の cogito の反映物と化してしまっているのである。それゆえ cogito は決して自己自身において自己自身を肯定することができないのである。かくして、cogito は、sujet であるかぎりにおける sujet としての自己自身を肯定せんとするや、避けるすべもなくあの idea の idea の idea …………… 等々として無限後退して行かざるをえないのである。しかしそれは畢竟、真の cogito など決して存在せず、néant だということではないのか？

かくして、ここにおいて一転して、再び cogito に関する實在論的な解釈が立ち現われて来る。すなわち、sujet であるかぎりにおける sujet としての cogito、それこそが実は逆に、objet としての cogito の単なる反映物でしかなく、換言すれば objet としての cogito が全く恣意的に主体化されたもの以上ではないと。こうして再び我々は objet としての我の方向へと連れ戻されることになり、しかもここにおいては、我の一部分としての cogito の本質の探求へと振り向けられるのである。再び我々は現象の連鎖に、cogito が次々と現わにする諸現象の集合体に直面するこ

となる。思考一般という *catégorie* (カテゴリー) が作成されるのはまさにこの領域においてである。しかしそれと共に我々ははてしなき問いのうちに投げこまれることになる。すなわち、我の本質ははたして本当に *cogito* のうちに存在するのか？ もし仮に存在するとするならば、それはいったい何か？ *objectivation* (対象化作用) か？ それとも？ さらに、*cogito* は、我の他の部分であるところの *vital* (生命的なもの)、*corporel* (身体的なもの) といかなる関係にあるのか？ そしてまた、他の諸対象、例えば他者や無意識的なもの、あるいは社会的環境や自然的環境とは？ 要するに世界なるものといかなる関係にあるのか？ 等々と終りなき我の目録作成の道へと引きづりこまれて行くのである。行っても行っても透徹しえない不透明な道へと。

我々は、*Que suis je?* という根原的な問いに触発されて、その答を最初は *objet* の側に、次いで *sujet* の側に見ようと試みた。しかし我々が発見したのはただ *néant* の厚いペールだけであった。何故か？ それは解決の道を踏み誤ったからなのか？ しかしそれなら何か他の解決方法が残されているのであろうか？ それはいったいどのような方法か？ かくして、新たに登場し来たるのが、サルトル的な自己意識の哲学 (*la philosophie de la conscience de soi*) である。

この自己意識の哲学は、*Je suis ce que je ne suis pas, je ne suis pas ce que je suis.* (私は私がそれであらぬところのものであり、それであるところのものであらぬ) を自らの根本原理としており、それゆえ *soi* (自己) と *conscience* (意識) は相互に他方の反映であるということである。つまり、真の自己はどちらか一方にのみ存在するのではなくて、両者が、球受け遊びのごとく、交互にそれであるということである。従って、例えば *Je marche* というような場合、真の自己は単にこの *Je marche* であるばかりか、さらにこの *Je marche* についての意識でもある、ということである。そして、ここにおいてこそまた、*avoir* (持つ) ということが決定的に重要な問題として浮かび上がって来る。なぜならば、*avoir* の原理はまさに自己意識の原理にほかならず、例えば、*J'ai le corps* (私は身体を持つ) ということは、*Je suis le corps, je ne suis pas le corps.* (私は身体であり、あらぬ) というのと同じだからである。これを裏返して言えば、もしこの場合において、どちらか一方が他方に——實在論的立場からは *le corps* の側に、逆に観念論的立場からは *la conscience* の側に——全面的に依拠することになるならば、それは所有の否定であるということである。

所有とは、意識と対象が相互に他方を完全に支配せんとする激越な緊張関係に外ならないのである。そして、この緊張関係においてこそ始めて、*le corps* が *mon corps* (私の身体) となり、しかもこの *mon corps* が他の一切の所有の根源でもあるのである。すなわち、*ma vie* (私の人生)、*ma pensée* (私の思想)、*mon désir* (私の欲望)、*mon livre* (私の本)……等々はこの *mon corps* の延長線上に存するということである。かくして、多種多様な日常性の世界がはてしなく繰り広げられて行くことになる。自己意識は飽くことなく多様な対象——*mon corps* を含めて——を *cerner* (包囲) し、*gérer* (管理) し、*aliéner* (譲渡、疎外) し続けるのである。

しかしこれで満足であらうか？ 我々は自己意識の次元においてやつと解決を見出しえたのであろうか？ そうではないのである。よくよく反省してみるに、全く明白なことは、自己意識の領域は *le cogito irreflexif* (非反省的なコギト)、つまり *le percipio* (我知覚す) の領域でしかなく、換言すれば、*Que suis je?* というあの根源的な問いが問われる以前の領域である。それゆえ自己意識は非反省的な欲望の世界に盲目的に安住しており、自己の欲望のためならば、それがどのような技術 (*technique*) であろうとも、手当たり次第に利用するのである。しかし自己意識は、實在論的な *cogito* と観念論的な *cogito* が未だ未分化のまま混濁した、本来不安定 (*inquiétude*) なものでしかなく、それゆえ一旦激しい動揺に見舞われるや、例えば、仕事の失敗とか失恋によって——ここにおける愛は所有を原理としているがゆえに、本来挫折するべく運命づけられている——その見せかけの安定性は脆くも崩れ去り、ついには *Que suis je?* と問わざるをえない状況へと追いつまされるのである。*Percipio* が自らの循環の輪を突き破って、實在論と観念論へと自己分解するのはほとんど避けられないのである。そして一旦自己分解が起こるや、たちまちにしてこの自己意識は我の単なる一表象、我に関する単なる一理論にまで下落してしまうのである。

ところで、ここにおいて次のように反論する人がいるかもしれない。すなわち、君は重大な解決方法を見落としている。我々は真の我を、*sujet* と *objet* の統一体として把握しなければならない、と。これに対しては、ただ次のように答えるだけで十分である。いわく、*sujet* と *objet* の *synthétique* (総合的) な統一体のうちに自己の像を映し出そうとするのは、観念論的な *fiction* (虚構) にしかすぎない。

以上、我々は、我に関する實在論的な解釈、観念論的な解釈、さらには自己意識の哲学と次々に反省の組上に上げ

て来たが、しかしそのいずれもがただかりそめの我をのみ提示しただけであった。我の探求を突き進めれば進めるほど、ますます深く底なしの沼に引きづりこまれたのである。どうやら我々は全く解決の道を閉ざされ、自分で自分がわからない、という絶望的な状況に追いつめられたようである。今や我々は、Je ne suis rien（我は何物でもあらぬ）、Je ne suis pas（我は存在せず）という恐るべき無の事実と直面するのである。

しかしながら、我々はなしうる限り可能な方法によってこの無を回避しようとする。自己意識は、實在論と観念論の混在したあり方において、欲望充足のための道具連関構造の組み立てに没頭しようとする。しかも、たとえそれが崩壊しても、だからといって自己意識がまっしぐらに無へと突き進むわけではない。自己意識は實在論の決定論的なうぬぼれ、あるいは観念論の独我論的なうぬぼれの多種多様な段階に逃げこもうとする。科学的な思考は、我に関する無際限な目録作成——ここにおいては自己意識の哲学もこの目録のなかに組みこまれてしまう——を可能ならしめるが、しかしその反面、それは無の絶対的深淵に落ちこまないように用心深く或る一定の段階で自己停止し、そして自己の理論を誇り、自己満足に陥り入るのである。それは *hétérocentrisme*（他者中心主義）を装った *égocentrisme*（自己中心主義）という奇妙な様相を呈する。一方、観念論的な *cogito* は自己の無限後退を全く恣意的に停止し、何ら根拠のない独断的な投影理論を振りかざして、自己を世界の根源、世界の中心とみなして、*concentrique*（同心円的）な世界構造の内に閉じこもるのである。それは *égocentrisme* の極致としての *pseudo-théocentrisme*（擬似神中心主義）に外ならず、倨傲が最終的に行き着くところの場である。

しかしながら、このようにして易々と無から逃亡することができるのは、今だ徹底的に無に直面していないからではないのか？ 我々の直面しているのは、単に *contemplé*（眺められたもの）としての無、*quasi-observé*（準一観察されたもの）としての無、要するに固定化され、目録化された対象的な無にしかすぎないのではないのか？ 逆に、もし無への沈潜が深ければ、もはやいかなる方法によって無から逃亡しようとも、逃亡するというまさにその仕方において、不断に無につきまとわれ、脅かされているのではないのか？

かくして、ここにおいてこそ、無への決定的な埋没としての絶望が危機的な現実として立ち現われて来るのである。今や、*Que suis je?* というこの根原的な問いが我々を絶望の深淵に投げこまずにはおかぬのである。しかしそれ

ならば、一体この絶望とはいかなるものであろうか？ 次に解明されねばならぬことはそれである。

第二章 絶 望

絶望が或る外的な動機（戦争、愛する人の死、経済的な破綻等々）によって解発されることは確かであるが、しかしそれはあくまで絶望への導きの糸であり、世界の絶望へのいざないにしか過ぎない。絶望は常に内発的な思考の深まりによってのみ、避けることのできない現実となるのである。それゆえ、絶望はとにかく感情的なあり方としてのみ見られがちであるにもかかわらず、実際はこれほど知的なあり方もないのである。絶望は思考が必然的に溺れ込んで行く底なしの沼である。

絶望は、それがいかなる仕方で定義されたものであろうと、決して *l'Être de Dieu*（神の存在）、あるいは *l'Être-même*（存在そのもの）を認めない。それゆえ絶望は我の超越的な *vérité*（真実）を、恒常的で永遠なる真実を否定する。しかしそれならば、或る何らかの仕方で我を時・空間的な世界の内に位置づけるのかと言えば、それもしない。絶望においては、*Je ne suis rien*（我は何ものでもあらぬ）である。しかもまた、絶望はこの否定を自己の根本原理として定立することもしない。なぜならば定立された瞬間、この否定は肯定へと転じ、明確な *vérité* として打ち建てられることになってしまうから。絶望はいかなるものをも *constatation*（確認）し、*affirmation*（肯定）することをしない。絶望はあらゆる肯定的な判断を停止し、差し控える。絶望は懐疑であり、無関心である。

それゆえ絶望者を定義するに最もふさわしい表現は、*Cela m'est égal.*（私にはどうでもよいことである）である。絶望者はいかなるものにも *assurance*（確信）を置かない。絶望者は何ものにも *dépendance*（依存）しないし、*adhérence*（執着）しない。絶望者は権力や名誉や職業が自己を支える基盤たりえないことを知っている。絶望者は家族的連帯や社会的連帯を空虚な観念の虚構としてしりぞける。絶望者は *vœux*（誓い）を立てたり、*engagement*（約束）を結んだりすることを拒絶する。絶望者は、それらが守られるいかなる保証も、自己のうちに世界のうちにも決して存在しないことを知っているがゆえに。なるほど、絶望者も時としては自己のうちに押さえ難い愛の充実を知ることがある。しかし絶望者はそれを奇妙な *illusion*（幻覚）としてあっさり捨て去る。絶望者にとっては、あらゆる *valeur*（価値）が等価であり、それゆえどうでもよい無縁の代物なのである。絶望者は希望なき *peessimiste*（ベシミスト）である。

しかしまた絶望者は agnosticiste (不可知論者) でもある。絶望者は自己の causalité (原因性) も finalité (究極目的) も知らないし、また知ることでもできないと主張する。絶望者にとって、自己はいかなる raison d'être (存在理由) もなく生まれ、生き、そして死んで行く不条理な生き物 (vivant absurde) である。絶望者は自己を explication (説明) したりしない。いやもっと正確に言えば、説明しては破壊し、破壊しては説明している。それはあたかも実験室の研究者のようである。しかし両者の根本的な相異は、絶望者は何ものをも期待しないということである。絶望者が時としてフロイト流の幼児期コンプレックスによって自己分析することがあっても、それは単なる気ばらしからでしかない。絶望者は自己弁解も後悔もなく約束を破り、他者を裏切る。絶望者の殺人は決してその人が憎いからではなく、C'est à cause du soleil. (太陽のせい) なのである。ただし絶望者には自己を律するいかなる規範も存在しないがゆえに。絶望者は救いようのない nihiliste (ニヒリスト) である。

しかし、絶望がこのようなものであるとすれば、それは避けようもなく絶望者を自殺へと追いやるのではないのか？ もしそうでないとするならば、それは、絶望者が、他の一切の価値はともかく、vivre (生きる) というこの一事にだけは絶対の価値を置いているからではないのか？ たとえ死が無意味であるがゆえに生きているにしても、あくまで生きているかぎり、絶望者は自己に執着し、自己の欲望に塞がれているのではないのか？ あらゆるものを懷疑しようとする自己の意志に反して、絶望者は秘かにこの生きるということを自己の根本原理となしているのではないのか？ それゆえ一旦この原理が脅かされるや、卑怯にも絶望者は自己弁解と後悔のうちに身を置くのではないのか？ しかしそれは結局、絶望者が絶望者であることを自ら否定することではないのか？

かくして、絶望者が自己の絶望を徹底せんとする時には、避けようもなく自殺へと追い詰められざるをえないのである。自殺はほとんど必然的とも言える絶望の一帰結である。

しかしそれにもかかわらず、絶望者はこの自殺をさえも dépassement (超出) して行く。Se supprimer (自殺する) ということは、今だなお抹殺すべき soi (自己) が残存しているということであり、それゆえ自己に執着し、自己に塞がれている。換言すれば、自殺へと方向づけられて行く絶望者は今だなお、Je ne suis rien という自己の無の徹底化が不十分である。なるほど絶望者は自己の真実性を疑い、se laisser aller (投げやり) という自己に対する無関心に陥ち込んではいるが、しかしそれにもかかわ

ず、いやそれだからこそかえって、限りなく自己に執着しているのである。それどころか、さらに一步を進めれば、絶望者はこのように絶望している自己自身にうぬぼれをさえ抱いているのである。自己の puissance (力) を自己自身のうちにのみ見出す、として定義されるところのうぬぼれが絶望とさえ両立するということは驚くべきことである。そして自殺とは、まさにこのうぬぼれの裏返しとしての自己嫌悪の行き着く結果にほかならないのである。

しかし事態がそうであるとするならば、自殺は無の徹底的な深化であるどころか、むしろ全く逆に、無へと滑り去って行く自己自身への憎悪あるいは不安から生まれて来るものにほかならず、それは結局、自殺が無からの最終的な逃亡だということである。

しかしそれにしても、この自殺が絶望者にとって、断えざる誘惑となるのは避けようもなく、それを完全に排除し去ることはほとんど不可能と言ってよいのである。

しかしそれにもかかわらず、決然として絶望者は自殺の誘惑を踏み越えて行く。絶望者は自己の絶望から逃げはしない。絶望者は無限に深い無の根底に向かってどこまでもどこまでも突き進んで行くのである。そして、それこそが真に絶望を dépassement (乗り越え) して行くことのできる唯一の方法である。しかしそれでは、この方法とはいかなるものであろうか？

かくしてここにおいて絶望者は、再び cogito の無限後退にまで立ち帰り、その深い意味を読み取ろうとするのである。

Cogito の後退は cogito を突き抜けて無限に進行して行く。それは objet と sujet, état と acte — しかし état と対立させられたかぎりの acte は所詮, état 化された acte にしかすぎないのだが — の dualité (二元性) を無限に超克しようとする思考の acte である。換言すれば、いつさいの判断を停止し、表象全体あるいは外観全体を一度徹底的に排除しようとする思考の acte である。つまりそれは、思考が自ら自己自身を否定しようとする acte だということである。しかもさらに、この文脈のうちにあらわれた「……しようとする」ということのうちに、思考の意志ないし思考=意志とでも言うべきものをも絶望者は読み取るのである。

今や、我々 — 絶望者としての我々 — はこのような思考の acte をガブリエル・マルセルの用語を借りて, recueillement (思念を凝らすこと) あるいは la reflexion à la seconde puissance (第二次元の反省) と呼ぶことにしよう。

しかしこの recueillement は、定義すればこのように単

純明快であるが、いざ実践するとなるとこれほど困難なものはないのである。なぜならば思考は分散するのがほとんど習性といってもよく、そして分散しているかぎり、思考は現象に執着しているのだから。絶望者が一瞬なりとも無にたじろぐや、たちまちにして絶望者は objet にしがみつく。それゆえ絶望者はこの recueillement を注意深く、かつ勇気をもって遂行して行くのである。事実、この recueillement のうちにはこの注意深さと勇気が包みこまれているのだから。そしてこの recueillement のみが絶望者に残された最後のそして唯一の絶望からの脱出路である。しかしそれでは、この recueillement は何を絶望者に教え、与えるであろうか？ 次に解明されねばならぬことはそれである。

第三章 Recueillement

前章からこの章への移行には何ら論理的な必然性がない。それは推理の必然性を超えている。その意味においてこの移行は偶然的だと言える。しかしだからといって、この移行が必然的でないと言うのではない。あくまでこの移行は必然的である。ただこの必然性は決定的な conversion（回心）の必然性によってのみ始めて可能となるのである。

さて、recueillement が自己自身において自己自身を知る（自知する）ためには、時・空間を超出した絶対的なく何ものか（quelque chose）の働きかけが第一条件である。しかし recueillement は、このく何ものか（何ものか）が究極的にはいったい何であるのか？ 表現しえない。それゆえ recueillement はこのく何ものか（何ものか）に対して、神という substantif（名）も l'Être（存在）という l'idée（観念）をも付与することができない。それどころか、このく何ものか（何ものか）をく何ものか（何ものか）と呼ぶことさえできないのである。このく何ものか（何ものか）はそれらを無限に超えた神秘（mystère）そのものである。そして、そういうものとしてのこのく何ものか（何ものか）が突然、présence（現存）するのである。しかしこの現存は、コップが我に面して présent（現存的）であるというような類いの対象的・物理的な現存ではない。それは、dedans（内）と dehors（外）を超出した絶対的な外からの appel（呼びかけ）であり、言い換えれば、絶対的な内からの retentissement（反響）である。それゆえこの現存は présent（現存）しているところの当のく何ものか（何ものか）と区別することができない。く何ものか（何ものか）は全面的に présence（現存）である。Présence（現存）の背後に本体としてのく何ものか（何ものか）が存在するわけではない。しかしだからといって逆に、présence（現存）がこのく何ものか（何ものか）であるというのではない。やはりく何ものか（何ものか）は無限

にこの présence（現存）を超出している。

しかし他面、このく何ものか（何ものか）が présence（現存）するためには、方法としての recueillement がなによりも不可欠な要件である。Je ne suis pas の徹底的な深化としての recueillement が。それは、實在論的な cogito の世界、観念論的な cogito の世界、自己意識の世界等々の一切合財を全否定せんとする思考の acte であり、換言すれば、自己の全存在を賭けた絶望者の必死の祈り（prière）である。

そして、この recueillement のぎりぎりの極限において、一挙にく何ものか（何ものか）が salut（救い）として現存し、一方 recueillement は自己の全体でもってこの現存を don（賜り物）として acceptation（受容）する。ここにおいて始めて、recueillement は自己自身を知るに到るのである。すなわち、recueillement は単に絶望からの脱出方法であるだけではなくて、それ自体が絶対的なく何ものか（何ものか）そのものである。より正確に言えば、く何ものか（何ものか）が recueillement であるそのかぎりにおいて、recueillement はこのく何ものか（何ものか）以外の何ものでもない。それゆえ recueillement が自知するということはこのく何ものか（何ものか）を知るということであり、さらに言えば、く何ものか（何ものか）がく何ものか（何ものか）自身を知ること以外ならないのである。それゆえ、このような recueillement の知は、過去への retrospection（ふり返し）や未来への projet（投企）というような対象的な知ではなくて、まさに intuition（直観）であり、もっと適切に言えば、確信であり、肯定であり、確認である。実際、この recueillement は、対象的・物理的な世界を超出した、métaphysique（形而上学的）・méta-problématique（超問題的）な神秘なのである。

そして、この確信に基づいているかぎりにおいて、recueillement は、自己が何を為し、何を語ろうとも、それはく何ものか（何ものか）が為し、語っているのである、ということを確認する。Recueillement はこのく何ものか（何ものか）の témoignage（証）あかしにほかならないのである。それゆえ、recueillement が神の御名を称え、存在の idée を思い浮かべるのも、それはく何ものか（何ものか）が称え、思い浮かべるのであるということである。しかし、さらに次のことをも確信するに到る。すなわち、この確信に基づいているかぎりにおいて、recueillement が自己自身を、そして結局それは同じことであるが、く何ものか（何ものか）を ex-pression（表現）することが許されると。この意味においては、神の御名も存在という idée も、さらにはく何ものか（何ものか）というこの概念さえもがこのく何ものか（何ものか）とただひとつのものでしかないのである。そして、この論文もその表現のひとつの試みである。

さて、絶望の無窮の徹底化としての *recueillement* は〈何ものか〉の内に *engagement* (参入) せしめられる。換言すれば、〈何ものか〉が *Je ne suis pas* であるそのかぎりにおいて、*Je ne suis pas* はこの〈何ものか〉であると。かくして、ここにおいて、死が通常と全く違った意味をもつことになる。すなわち、死は *J'étais* への上落でもなければ、*Je serai* への跳躍でもなく、まさに〈何ものか〉そのものへの参入であると。*Recueillement* は我の絶対的受動性を確信するのである。

しかし同時に、*recueillement* は *rentrer en soi* (自己への回帰) である。しかしこの自己への回帰は決して対自的 (*pour soi*) に自己に面することでも、*sujet* と *objet* の知的統一と同一化 (*identification*) の企てでもない。そうではなくて、それは、そこへと *retour* (回帰) するところの自己がもはや自己自身のものではなくなっている、そのような自己への回帰である。それは、*devant soi* (自己の前) と *en soi* (自己の内) の区別が完全に消失しているような自己への回帰である。それは、〈何ものか〉が *irradiation* (光り輝い) ているような真の *réalité* (現実性) としての自己への回帰である。それゆえ、要するに、自己への回帰とは、*Je suis* (我あり) と *Je vis* (我生きる) の両者の真実をそのうちに含んでいるところの *J'existe* (我実存す) への回帰だということである。しかもこの *J'existe* は決して *Je* と *existe* に分解できないだひとつのことがらなのである。*Recueillement* は我の絶対的主体性を確信するのである。

依って、この *recueillement* においては、*Je ne suis pas* = *Je suis* であり、死と生はただひとつのことでしかないのである。

しかし、この神秘的な連関を *recueillement* が確信するに到るのは、具体的な経験のうちにおいて、またそれを通してである。そしてそれこそが出会い (*rencontre*) に外ならないのである。しかし、*recueillement* はこの出会いを予測できないし、まして出会いの数を *supputation* (打算) することなどとても不可能である。出会いはただひたすら、〈何ものか〉の無限の *puissance* (力) に依存するのである。

ところで、〈何ものか〉の呼びかけとしての出会いのうちにおいて、偶然的であつ必然的な出会いのうちにおいて、始めて他者 (対象) は一挙に *toi* (あなた) へと転回する。*Recueillement* はついに他者の *l'existence* (実存) を確認するのである。他者は我であり、我は他者である。しかしこの確認は我と他者の物理的な *identité* (同一性) の確認ではない。物理的にはあくまで我と他者は異なっている。

そうではなくて、それは〈何ものか〉が我と他者を透徹しているということの確認である。そして、この確認にこそ、*avec* (共に) という語の深い意味が存するのである。

そして、この出会いのうちにおいて、*recueillement* は自己が愛 (希望) そのものであることを確信する。*Le sacrifice de soi* (自己犠牲) であり、*se abandonner* (自己放下) であることを。愛においては、自己への執着、ひきつり、閉じこもり等々が完全に否定され、自己は全面的に開かれている。愛とは、死の絶対的受動性であり、それゆえ他者の欲望充足のための道具として利用されることをもあえて厭わない完全な無抵抗である。しかし同時に愛は、魂と身体一体化としての *J'existe* の絶対的主体性であり、他者への積極的な呼びかけでもある。愛は積極的に他者の回心を促そうとするのである。

しかし、この愛の呼びかけは失敗するのがほとんど普通だと言ってよい。しかしだからといって、愛が自己自身までも否定し去りはしない。我と他者の絆は聖なる〈何ものか〉によって加護されており、生死を超えた永遠不滅なものであるという愛の自己確信は傷つくことがない。そもそも愛は、或る対象的な何ものか——たとえそれが死後なお残る他者の *éffigie* (肖像) や思い出であろうとも、そのような何ものか——への愛ではなく、それゆえ対象的な何ものかの *absence* (不在) によって左右されることが決してないのである。だから愛は、どれほど過酷な挫折にも屈することなく、あくまで希望をもって繰り返し繰り返し他者に呼びかけるのである。

しかしそれにもかかわらず、このような愛の自己確信は断えざる危険のうちにある。たしかに愛は、〈何ものか〉を裏切る自己の卑怯さと弱さ (*fragilité*) こそが悪の根原 (原罪) であることを知っている。*engagement* (約束) を破ることが悪であるのは、まさに愛がそこへと *engagement* (参入) しているところの〈何ものか〉そのものを自ら裏切るからである、ということを知っている。しかし知っていながら、愛は自己自身から離反する。こうして再び、自己意識の世界が、さらにそれとの大変な緊張関係において、實在論的な *cogito* の世界や観念論的な *cogito* の世界が、いやそればかりか、それら諸々の世界の中途半端な否定としてのかぎりにおける絶望の世界さえもが、複雑に絡み合いながら際限もなく繰り返されて行くことになるのである。

しかし逆に、このような悪の世界のうちにおいてこそ、かつそれに抗して、想起された愛とでも言うべきものが、本来の愛そのものに忠実 (*fidélité*) であるようにと断えず要求している。しかしこの想起された愛は所詮、対象にし

かすぎないがゆえに、あくまで契機としての役割をしか果たしえない。愛が自己自身に立ち帰り、それに忠実であるか否かは、ひとえに愛それ自身にのみ依存することがらである。

ところで、ここに言うところの忠実とは、習慣や規則への忠実がとかく陥ち入りがちなの硬直した忠実ではない。それどころか全く逆に、それは、*détente*（緊張緩和、ゆとり）と *disponibilité*（柔軟性）のうちにおいて、そのつどそのつど新たに創造されるところの創造的忠実（*la fidélité créatrice*）にほかならないのである。

そして、この創造的忠実に基づいているかぎり、悪の世界は排除され、代わって愛の世界が漸えず新たに創造されて行くことになる。この世界にあっては、技術は欲望から切り離されて、ただ愛の喜びにのみ貢献する創造的な秩序のうちに再構成されて行くのである。しかしそのためには、どうしても科学的な理論の基礎づけが必要である。かくしてここにおいて再び、*cogito* が自己を主張し始める。しかしここで言うところの *cogito* はもはや観念論的な *cogito* ではない。この *cogito* は、観念論的な *cogito* があれほど確認しようとしながらも、ついに確認することのできなかつた自由な *acte* そのものとしての *cogito* に外ならないのである。愛が自己自身を純粋な *acte* として確信するや、直ち

に愛は自己自身を *cogito* として確信するのである。それゆえこの *cogito* は、抽象的な *image*（像）としてではなくて、真の *l'existence*（実存）としての *l'on pense*（人思う）とただひとつのことではない。この *cogito* は自閉的な *cogito* ではないのである。それゆえ、このかぎりにおいてならば、いっさいの対象がこの *cogito* の反映であると言い切ることもできる。換言すれば、この *cogito* は観念論的な *cogito* の真の確認なのである。しかし他面、この *cogito* は實在論的な *cogito* と同じものである。それゆえこの *cogito* は対象の反映でしかなく、対象以上のものではないのである。なるほどこの *cogito* があくまで対象を無限に超出していることは確かであるが、しかしそのかぎりにおいてならば、この *cogito* は対象とびたり合致するのである。そこで、この *cogito* は何のためらいもなく無際限に対象——対象としての我をも含めて——を分析して行くことが許されるのである。

かくしてここにおいて、愛は次のことを明晰に確信するに到る。すなわち、愛がそれらを根拠づけ、またそれらを包越（*enveloppement*）しているそのかぎりにおいては、實在論的な *cogito* と観念論的な *cogito* はただひとつのものでしかない。そして、この愛のうちにあってこそ、愛は、再びそしてどこまでもどこまでも次の問いを問い続けるのである。いわく、*Que suis je?*（我とは何か?）と。

〈注〉 この論文は終始一貫マルセルの形而上学の甚大な影響のもとに書かれた物である。